衛星放送を利用した日本語教育

――豪州（オーストラリア）・米国（アメリカ合衆国）の試み――

国際交流基金日本研究部企画開発課

● はじめに ●

国際交流基金は、その附属機関である日本語国際センター（埼玉県浦和市）が開設された平成元年度（1989年度）以来、事業立案上の参考とするため、毎年、海外の日本語教育関係者を日本にお招きして「国際懇談会」を開催してまいりました。

今年度の国際懇談会は、豪州（オーストラリア）と米国（アメリカ合衆国）で衛星放送やマルチメディアを利用した日本語教育に関わっておられる専門家の方々６名をお招きして、1997年11月７日に東京（国際交流基金国際会議場）で開催いたしました。

1. 豪州からの報告

（1）衛星放送日本語番組「にほんごだいすき」

はじめに、豪州の方々から発表がありました。まず、サリー・シマダ先生とキャサリン・ジョナック講師から、ニューサウスウエルズ州の主導により始まった "ALS"（Access to Language via Satellite）についての報告がありました。

この "ALS" は小学生（３年生～６年生）を対象とした LOTE（Languages Other Than English）教育のための衛星放送番組で、日本語のプログラムは「にほんごだいすき」（Nihongo Daisuki）というタイトルです。1997年は30分番組が週２回放送され、豪州全体で約７万人の小学生がこの番組で日本語を学びました。

（2）「にほんごだいすき」の利点

この番組の最大の利点は、これまで日本語学習の機会に恵まれなかった遠隔地の子供たちも、日本語や日本文化を学ぶことができるようになったことにありますが、それ以外にも教師の日本語運用力の足りない部分を補うことができる、あるいは生徒だけでなく教師も一緒に日本語を学習することができるなどの利点があります。

また、「にほんごだいすき」は生放送されていることから、送り手（スタジオ）と受け手（クラスルーム）の

海外参加者

【豪州】

サリー・シマダ　Sally Shimada
（ニューサウスウエルズ州学校教育省日本語コンサルタント）

リチャード・ハリソン　Richard Harrison
（メルボルン大学アジア研究学科専任講師）

キャサリン・ジョナック　Catherine Jonak
（国際交流基金シドニー日本語センター専任講師）

【米国】

ティモシィー・クック　Thimothy Cook
（ジョージア公共放送局「いらっしゃい」日本語講座講師）

當作靖彦
（カリフォルニア大学サンディエゴ校準教授）

古山弘子
（国際交流基金ロス・アンジェルス日本語センター専任講師）

国内委員

坂元　昂（メディア教育開発センター所長）
西尾珪子（社団法人国際日本語普及協会理事長）
水谷　修（国立国語研究所長）

リアルタイムによるインターアクションが可能です。ジョナック講師の報告によれば、この番組を実際に利用している小学校教師の多くも、そのことをこの番組の大きな長所として挙げているそうです。

（3）コンピュータを利用した日本語教育の可能性

ハリソン先生からは、コンピュータを利用した日本語教育の可能性が報告されました。同講師は、同じネットワーク上にいる他の学習者と時間や空間を超えてコミュニティを構成できることがコンピュータを使用した場合の利点であると指摘し、様々な地域に住む学習者や教師を結ぶ道具としてのコンピュータの役割とその可能性を示唆しました。

2米国からの報告

（1）テレビ日本語講座「いらっしゃい」

つづいて、米国の方々から発表がありました。ティモ

シィー・クック先生は、1988年からネブラスカ教育テレビ局で始まったSERC（Satellite Educational Resources Consortium）の日本語教育番組の講師を務めた後、1995年からはジョージア公共放送局のテレビ日本語講座「いらっしゃい」の講師を務めています。その立場から、衛星放送を利用して日本語教育を実施する上での課題、とくに学習者とのインターアクションをどのように確保するかという課題について、経験を交えて報告するとともに、スタジオにいる教師とクラスルームにいる生徒の間に地理的な隔たりを越えた一種のコミュニティー意識を作り出すことの重要性について指摘しました。

（2）中等教育レベルの遠隔日本語教育の概要

古山弘子講師からは、中等教育レベルの遠隔日本語教育の概要に関する報告がありました。それによると、米国では新たな遠隔教育プログラムが誕生する一方で、今まであったプログラムが中止になったり、あるいは使用メディアを変更するなどの試行錯誤が続いているそうです。また、各プログラムは技術的な面での向上を図るとともに、内容面においても様々な改善に取り組んでいます。ただし、とくに大規模なプログラムにおいては、日本語教師がいる通常のクラスとの接点があまり考慮されていないとして、古山講師は両者の連携の重要性を示唆しました。また、人間と人間のコミュニケーションの手段である言語の教育においては、（とりわけ学習者が人格形成の途上にある中等教育レベルの場合は）メディアが教師の役割を完全に代行することは不可能であるとの見解から、人間にしかできないこととテクノロジーの方が効果が高いことを見極めることの重要性について指摘しました。

（3）インターネットを利用した日本語教師研修

當作靖彦先生は、インターネットを利用した日本語教師研修プロジェクト "Institute for the Teaching of Japanese"（ITJ）に関わっています。このプロジェクトは、米国の非営利団体であるローラシアン協会が1996年から開始した事業で、小学校～高校の現職教師が対象です。参加者は登録時にコースの開始日を知らされ、参加者全員がほぼ同じペースでコースを進んで行く仕組になっています。これは、参加者どうし、あるいは参加者とモデレーター間のインターアクション（電子メールやチャットを利用）を重視しているからです。

左からシマダ、ジョナック、ハリソン、クック、古山、當作の各先生

ただし、教師とのインターアクションがコースデザイン上、重要な要素となる言語教育の場合は、画像や音声をインターネット上で送信したとしても、高度のインターアクティビティーが確保できるのか、當作先生は疑問だとしています。このため、衛星放送やインターネットの技術がいくら発達しても、そのプログラムが成功するための一番大切な要素は結局のところ人間であると、當作先生はお考えです。

パネル・ディスカッションの開催

翌日の11月8日には、坂元昂先生、西尾珪子先生、水谷修先生の3名と海外からお越しいただいた上記の6名によるパネル・ディスカッションを開催しました。水谷先生の司会により進められたこのパネル・ディスカッションには日本語教育の専門家を中心に70名ほどの人が参加して、活発な議論が展開されました。

とくに、遠隔教育におけるインターアクションの重要性、人間と技術の役割分担を明確にすることの必要性について、多くの人から発言がありました。

● おわりに ●

国際交流基金は、海外の日本語教育を効果的に支援していくためには、各国の日本語教育事情をきちんと把握することが大切だと考えています。その方法のひとつとして、今後もこの「国際懇談会」を開催していく予定です。明年開催の国際懇談会につきましても、その概要は、この『日本語教育通信』でお知らせしたいと思います。

最後になりましたが、今回の国際懇談会でパネリストをお務めいただいた水谷先生、坂元先生、西尾先生、そして豪州と米国からお越しいただいた6名の先生方に対して、厚くお礼申し上げます。